

平成 29 年第 2 回 吹田市高齢者生活支援体制整備協議会議事録

1 開催日時

平成 29 年（2017 年）7 月 24 日（月） 午後 2 時開会～午後 4 時閉会

2 開催場所

千里山コミュニティセンター 多目的ホール

3 出席委員

新崎 国広委員（大阪教育大学教育学部教育協働学科 教授）

清水 泰年委員（公益社団法人 吹田市シルバー人材センター 参事）

徳永 英明委員（株式会社ダスキン ホームインステッド吹田ステーション）

美馬 美知紅委員（特定非営利活動法人 ニッポン・アクティブライフ・クラブ
ナルク吹田（友遊悠）代表）

中谷 恵子委員（吹田市ボランティア連絡会 副会長）

半崎 智恵美委員（NPO法人 市民ネットすいた 理事）

樋口 敬子委員（吹田市高齢クラブ連合会 事務局長）

宮本 修 委員（吹田市民生・児童委員協議会 副会長）

金戸 省三委員（社会福祉法人吹田市社会福祉協議会 副会長・常務理事）

山本 清美 委員（吹田市介護保険事業者連絡会 居宅介護支援事業者部会 実行委員）

富士野 香織委員（吹田市介護保険事業者連絡会 訪問介護事業者部会 部会長）

大谷 治 委員（社会福祉法人吹田市社会福祉協議会 地域福祉課主査・広域型生活支援コーディネーター）

鈴木 和子委員（市民委員）

星野 洋子委員（市民委員）

新宅 太郎委員（社会福祉法人吹田市社会福祉協議会 地域福祉課主幹（コミュニティソーシャルワーカー））

川口 紀子委員（吹田市岸部地域包括支援センター センター長）

今峰 みちの委員（吹田市福祉部高齢福祉室長）

4 欠席委員

藤原 俊介委員（山三地区自治連合協議会 会長）

5 会議案件

1 開会

2 案件

(1) 前回の振り返り、今後の方向性について

(2) 「我が事・丸ごと」地域共生社会について

(3) 全体協議「必要な支援に対するアプローチについて(2)」

(4) その他

6 議事の経過

〔開会〕

〔資料確認〕

〔傍聴者の報告〕

事務局：

傍聴者は4名です。5名以内ですので、全員の方に入室していただいています。

〔委員長挨拶〕

委員長：

皆様、暑い中お集まりいただきまして、ありがとうございます。今回は、吹田の強みを活かした支援のプログラムを考えていこうというのが主なポイントだと思います。ありがたいことに、毎回、傍聴者の方が参画していただいています。こういった形で、会議に対して市民の方々が関心を寄せていただいているということは、本当に宝物だと思っています。今日も皆様の忌憚のない御意見をいただきながら、吹田らしさのある生活支援の体制整備を考えていけたらと思います。

〔案件1：前回の振り返り、今後の方向性について〕

委員長職務代理人：

(前回の振り返りと今後の方向性について説明)

前回の協議会では、生活支援調査から見てきたニーズや、これから必要な仕組みづくりについて皆様から御意見をいただきまして、私の方から助け合いの仕組みとして「ちょこっとサポーター」の叩き台を提案させていただきました。この「ちょこっとサポーター」に関しましては、多くの委員の方から「必要な仕組みだ」という御意見をいただきましたが、委員長の総括で「サービス提供の視点で議論を進めていく前に、住民主体の助け合い活動をどのように作り出していくかという視点で議論してはどうか」という御提案をいただきました。「ちょこっとサポーター」という仕組みはこれからの吹田に必要なとは思いますが、その話をする前に、まず核となる住民同士の助け合い活動をオール吹田でどう作り出していくのかという議論をしていきたいと思っています。議論の到達点としては、皆様が協議会でどういったことを考えていくのかという共通理解を図り、それが3回目、4回目につながっていくという流れにしていきたいと考えています。委員長は他市の現状もよくご存じで、吹田の地域福祉計画にも関わっていただきましたが、その中で、吹田らしさとして、地区福祉委員会が取り組んでいただいています小地域ネットワーク活動や、ボランティアセンターの活動といった活発な活動を活かしていくという御提案をいただきました。皆様からも御意見いただきたいと思っております。

先日、佐竹台地区の福祉委員長と話をする機会がありましたが、自治会の中で「お手伝いネット」を立ち上げたとのことで、どういったきっかけで立ち上がったのか聞きました。佐竹台サロンというサロンがありまして、水曜日以外の月曜日から金曜日に、午後1時から4時で活動をされています。それに参加されている高齢者の方が、何かチラシが入っているのを見たそうです。掃除の業者で、風呂掃除が通常1万円のところ、キャンペーンで5千円だというチラシだったそうです。それを地区福

社委員の委員長に見せて、「こんな頼んでも大丈夫かな？」という話をされたので、「どこの業者かも分からないし、追加料金を請求されるかもしれないから、こんなことなら自分がしてあげる」と言い、非常に行動力のある方なのですが、デッキブラシを買ってきて、掃除したそうです。それを自治会の中で組織化して、何でも相談できるネットワークとして有志を募って、担い手も何人かいるというお話を聞きました。初めは無料でしていただけれども、してもら側の人申し訳ないからということで100円だけもらうようになったという経過も聞いております。これから協議会で進めていきますことについては、こういった困り事の声の聞いて「そんなことなら自分もやってあげる」といった形が各地域で生まれてくるのが望ましいのではと思います、紹介させてもらいました。

協議会で進めていく流れにつきましては、時間はかかりますが、地域での困り事を地域住民で支えていくということに気付いてもらいながら、それを支える仕組みをつくっていくということで考えています。時間がかかるとは言いましたが、これから高齢者が増えて支援の担い手は減ってきますので、2025年を見据えて、地域でできることを一緒に考えていながら仕組みづくりに取り組んでいきたいと考えています。

事務局：

(吹田市高齢者生活支援体制整備協議会と行政の役割について説明)

〔案件2：「我が事・丸ごと」地域共生社会について〕

委員長：

前回の最後に、吹田らしさということをお話させていただきました。これは今までの議論をなくしてしまうのではありません。私自身は吹田市民でもなく、外から来ている人間だからこそ見えることがあります。吹田らしさとは何か。一つは、地区福祉委員という地縁の組織、民生委員の方々の組織が社会福祉協議会を中心にしっかりされておられて、そこで毎年のように計画を立ててやっておられるというように、非常に支援型の熱心なコミュニティワークができているということ。それともう一つは、ボランティア連絡会は精神保健福祉法ができる前からずっと精神障がい者の方の支援に関わっておられるということで、テーマ型の活動も非常に熱心であるという、その二つの点を活かさない手はないということが、提案の意図でした。

(「我が事・丸ごと」地域共生社会について説明)

〔案件3：全体協議「必要な支援に対するアプローチについて(2)」〕

委員長職務代理者：

(吹田市の介護保険サービスと介護保険外サービスについてと、他市の生活支援サービスや介護支援サポーターの取り組みについて説明)

今一度、この協議会で進めていく方向性についての確認ですが、地域における住民同士の助け合い活動をどのように作り出していくのかを考えていきたいと思っております。前半と後半で時間を分けて考えていますが、一つ目のテーマにつきましては、住民の方に「我が事」としてどのようなことが求められるのか、地域の中で助け合い活動を広めていくためには、どのようなことが必要かということで、皆様から御意見をいただきたいと思っています。自分の地域や団体でしている活動について、地域での実例を皆様と共有してもらって、今ある活動を活かしていく視点で皆様から御意見をいただきたい

と思っております。

A委員：

私の妻が、知人に誘われて「いきいき百歳体操」に通っています。私は地区福祉委員会で「歩こう会」をしていて、ごく限られた方の参加ですが、日曜日の朝に皆で歩いています。「いきいき百歳体操」については、非常に良い活動だと高く評価しています。私は参加したいと思っても定員があるので参加できませんが、ゆっくりの体操で筋力をつけて、実際にすごく効果があると聞いています。地域の高齢者のお茶飲みサロンは何故か広がらないのですが、この「いきいき百歳体操」は実際に元気になったという実績もあって、口コミで広がっています。非常にニーズが高いと私は思っています。この中で体操を30分ほどするらしいのですが、認知症予防のクイズを妻が頼まれてしているなど、非常に自主的な活動になってきています。私が非常に良い動きだと思っているのは、その中で知り合いがたくさんできたり、情報が入ったり、話し合いがあったりして、少し困った問題についても、素直に話が出てくるそうです。毎週月曜日にボランティアの方がしておられるのですが、それだけニーズがあって盛んになっているということなので、こういった活動に力を入れていただきたらと思います。私は地区福祉委員会の活動をずっとしてきましたが、この活動はすごく良いと思います。特に健康問題は高齢者にとっても一番問題になり、筋力をつけるというニーズが高いので、こういった活動を中心に、どう活かすかということを考えていきたいと思いました。

委員長：

まさに「高齢者の社会参加」につながってきますが、このように、体操を受ける側、実践して教えていく側という形で、自主的に活動していけるという御提案でした。また、そのように集まった場が、困り事を抱えたり、少ししんどいといったことの情報共有の場にもなるという、そういう場づくりというアイデアとして出させていただきました。

色々な会議に出させていただいた時に、支援型とテーマ型で「なるほどな」と思ったのが、福祉委員さんや民生委員さんがサロンをやっておられますが、そのお世話をするのはあまり苦にならないが、メニューを考えるのがとても大変ということでした。いきいき百歳体操を教えたり広めたりするようなテーマ型のグループと、それぞれの地域で高齢者の方々へ配食サービスやサロンなど居場所づくりをしている支援型のグループが協働できたら、面白いものができそうだと、アイデアをいただいたような気がします。

B委員：

そういう場として、今、吹田市には高齢者いこいの間というのが35か所設置されていて、そこを使ってサロン活動などを行っている高齢クラブもあります。無料ではなかなかできないので、100円や200円という形でお金をいただいて、赤字が出ないようにしていますが、公共施設では利益が出るようなことをしてはいけないというのが本来だと思います。ただ、人の顔が見える場という必要性を考えた時に、やはり時代が変わってきているので、今までのようにお金に関わることは一切してはいけない、というのは少ししんどいのではないかと思います。人が一番集まるのは、何か食べたりすることだと思います。お食事のメニューを考えるのは大変ですが、例えば朝御飯のサロンにすると、トーストだけで済みます。ジャムや蜂蜜は、一人暮らしだと食べ切れる自信がないと思います。しかし本当は3種類くらい買って、その日によって選びたいと思います。それに対し、できるかはわかりませんが、福

社委員さんがふれあい昼食会のように補助金を使えればと思います。その辺のルールづくりを柔軟にしていただけたらと思っています。

委員長：

理想は無料かもしれないが、持続可能な形ということで、有料制も検討してはどうかという御意見ですね。今までの行政であった、飲食はしないと、無料でということを変更していくということですね。

C委員：

地区福祉委員は地域で昼食会やいきいきサロンを展開していますから、地域の方と本当によく顔を合わせています。33 地区の福祉委員会がありますが、何に困っているかなど色々とお話ができます。デイサービスに通っている方でしたら、そのデイサービスの中でできたらいいのですが、なかなかそれでは済まなくなっています。33 地区が一堂に会するのはなかなか難しいですが、どこかが率先しなければと思っています。介護支援サポーターの資料を見ると、吹田市全体的な形で取り上げているので、それぞれの地域性を活かして何かの形で関わっていきたいと思っています。ボランティア連絡会など地域の団体と一緒に進めていければ、何かの形で一つの輪が広がっていくのではと思っています。また、高齢クラブの話であったように、元気な高齢者も地域には多くいらっしゃるので、福祉委員になった人だけでなく、地域の中でできる方も巻き込みながらしていければと思います。

委員長：

以前、地域福祉活動計画に出させていただいた時に、それぞれの福祉委員さんの特徴や、長年お住まいの方々に組織化しているところや、人が新しく入ってきてなかなか地区福祉委員会の組織化が進みにくいところなど、色々あったと思いますので、今、C委員が仰ったように、福祉委員はこうするというように一つ決めてしまうのではなく、それぞれの特徴を活かした活動をモデル的に始めて、広げていくというのも有効な気がします。

D委員：

困りごとのサポートを地域ごとで募り、何か手助けできる人が名乗り出るという形にしてはどうでしょうか。今は福祉委員さんだけで他との連携がないので、もう少し多くの人に関わっていけば、実現可能なものができるのではと思います。

E委員：

地区福祉委員さんが熱心にしておられるところもあれば、そうでないところもあると思いますが、特色はそれぞれあってもいいですし、そのためには全体のコーディネーターが必要だと思います。地域のボランティアさんで手を挙げて「こんなことができる」と言ってくれた人たちを一覧表にまとめておけば、コーディネーターに何か困り事が入った時に「この地域はこの方がいるから、行ってもらおう」と考えられるような仕組みが良いのではと思います。前回の協議会後に、ボランティア連絡会として意見をまとめたいと思いましたので、役員会で意見を募りました。ボランティアさんは色々なところで活動する中で、何か困り事があればついでにしてあげている、ということをお聞きしました。個人的にしてあげているという意見もありましたし、マンションの中で色々なサポートをして

いるところもありました。

委員長：

サポーターを募ることや、困り事を聞いていくことは、地域別ですということがすごく重要ということですね。

B委員：

サポートしたい気持ちがあってもなかなか時間的な余裕のない人にとっては、「何かできますか」と聞かれても「できます」と自信をもって言えないところがあるのですが、どんな困り事があるかを募って、「こういうことをしてほしい」という、たとえば「そろそろ衣替えをしたいと思っている」とか、「何曜日にはゴミ出しを手伝ってほしいと思っている」とか、そういうリストがあれば、「その日なら行ける」とか、「帰りに買い物してきてあげる」とか、できる範囲が自分で調節できると思います。どのような形ですればよいのか分かりませんが、そうすれば手を挙げやすくなるのではと思いました。

委員長：

例えば阪神淡路大震災の時には、被災された方がボードに「こういうことを応援してほしい」と貼り出して、それを見て住民の方やボランティアの方が「これならできる」という形でニーズのマッチング、需給調整をしたという仕組みもあるので、そういうのも一つのアイディアになりそうですね。枠組みを決めてしまうのではなく、地域の中で「してほしいリスト」を作り、それができる人を探すということですね。

F委員：

住民主体の地域づくりということをキーワードにして考える時に、役所が制度化して予算をつける時の発想は、どうしても全地域ということです。一部の地域しかできないことだと手を付けづらいということもありますし、費用の設定なども細かなところまで決めてかからないと、なかなか役所ではできづらいという点があります。そこは仕方がないと思いつつ、先程から出てきているような柔軟性とは相容れないという訳でもないと思っていて、地域から生まれ出てきたサービスでうまくいった事例を取り上げて、そこに何らかのバックアップで補助金を出すなどし、そこから広げられないかというように、折り合いをつけていくことはできるかと思い、色々と柔軟なアイディアをお聞きしたいと思っています。B委員が仰ったように「何ができますか」と聞くのは難しいと思っています。テレビで見たのですが、どこかの大規模な古い団地で「よろず屋さん」が週に1回お店を出しに来ていて、そこに芸能人が体験で入って「何でもします」と言っていると、高齢者の方が開かない瓶を持ってくるのです。「この瓶を開けて」と言うので100円くらいで、その芸能人に開けてもらって大喜びされていました。そういうこと一つをとっても、やはり「頼みたい」「できないな」ということがあるのだとすごく感じました。そういう困り事と、「それならできる」というのを、うまくマッチングできればと思っています。

最初にA委員が仰った百歳体操ですが、去年あたりから高知市で非常に実績のあった体操を吹田市でも介護予防の中の一つの核になるツールとしており、体操自体は手段なのです。介護予防の一つの体操ですが、ただ特徴としては非常に筋トレの効果が高いということと、その効果が自分でも実感で

きるまで長続きさせやすいということ、指導者がなくてもDVDを見て自分たちで運営をするということが基本なのです。市が主催をした教室に来てもらって、先生と生徒であったり、主催者とお客さんという関係ではない形を展開していきたいです。それがうまくいった高知から、色々とDVDや自立支援を教えていただいた中で、自主運営が基本というのが条件のようになっています。「市がやりますから、場所も確保するから、来てください」という従来のやり方をした方が、もしかしたら最初は簡単かもしれませんが、ぐっと我慢しています。こんな体操がありますというのを1回お試しでして、「やってみたい」「場所は見つける」「自分たちでできる」となるのを待って、それから専門職が4回ほど支援するという、お試し1回コースと、立ち上げサポート4回という、この2種類しか用意していませんが、お試しから繋がったところが非常に多いです。自分たちのグループ、自分たちの活動だと思っていただいているところをポイントにしているので、そこに専門職の職員と予算をつけて市が仕掛け人にはなっているのですが、もう裏方になっているというのが特色かと思っています。

委員長：

F委員のお話の中で二つすごく特徴的だなと思ったのが、一つは、行政でできることと住民でできることの役割分担があるということです。行政はやはり責任があり、住民に責任がない訳ではないのですが、きっちりと形として役割を作っていないと行けないので、どうしても柔軟な取り組みというのは難しいです。住民の方々はそれぞれ自分の生活している中での思いがあるから、逆に言うところ、すごく柔軟な取り組みができます。ただしそれを全域でしようと思うと、それぞれの地域にバラつきがあるので難しい部分は行政が取り組む課題として、地区では住民の方々が自主的にしていくという、役割分担を整理していただいたと思います。今「なるほどな」と思ったのが、健康体操を今までのように「これしますからどうぞ」というトップダウンではなく、住民の方々の意欲を待って、そして主体的に動きたいというところ、これがまさに今回の地域づくりのポイントだと思います。これはうちの大学がある柏原市の例ですが、健康体操と同じように椅子に座ったまま誰でもできる河内音頭というのを取り組んでおられて、車いすの方とか、高齢でしんどくても椅子に座ったままできる河内音頭というのを自主的にボランティアグループの方がいらっしゃって、そこが包括の方と一緒に夏になったら皆様で、「私は体が弱いから河内音頭はできない」ではなく、「上半身だけでも楽しみましょう」という形でモチベーションを上げていくということと、今のお話のように健康づくりとして自分たちでやりたいということと、すごく繋がっていると思って聞かせていただきました。吹田は河内音頭ではないので百歳体操でいいと思いますが、一つのキーワードは「楽しい」とか「面白い」とか、そういう活動を作っていくと、有償とか関係なく、あと「やりがい」とかもありそうですね、そういうのもありかなと思います。

G委員：

33 地区福祉委員会がありまして、どこも地域の実情に応じて非常に熱心に取り組んでおられます。その中で思いついたのが、先程の「我が事・丸ごと」地域共生社会でもありましたように、支え手と受け手、スタッフと参加者という垣根を越えて、皆でしていこうというのが「我が事・丸ごと」だということのように理解しているのですが、それが吹田でも実践されています。例えばいきいきサロンがあるのですが、その参加者が実は地区福祉委員が担っている子育てサロンのスタッフを担っていらっしゃったりしています。これは、高齢者だから参加する、いきいきサロンの参加者だから参加者、という

のではなく、参加者でもできることは手伝えるという一つの表れかと思っています。日頃はいきいきサロンの方に高齢者の参加者として楽しまれているのですが、子育てサロンの方では、小さい赤ちゃんを見るのが好きだからということで手伝っていただくなど、一概に、参加者だからといってずっと参加者ではなく参加者でもスタッフになりえるのだなど。福祉委員会の中でも特異な例かもしれませんが、吹田で自然体験交流センターというのがあります。そこで自分たちでカレーを作るという取り組みがあります。それが非日常的と言われてしまえばそれまでかもしれませんが、普通でしたら食事会でしたらカレーを出してもらって側です。一緒になって皆で触れ合ってご飯を食べようという参加者になるのですが、このときばかりは皆でカレーを作るということで、参加者でありながらスタッフでもあると言えるのではと思います。

委員長：

今、G委員のお話を受けて、「我が事・丸ごと」地域共生社会で言い忘れていたことがありました。「我が事・丸ごと」地域共生社会の一つの目的として、今、G委員が仰ったように、支援する側と支援される側という2極の構造をつくるのではなく、ケアリング・コミュニティという言い方を原田正樹先生はしているのですが、日本語で言うと相互実現型の地域づくりとか、自立支援、こういう言い方をしている、高齢者の方がサロンの時には利用者になるが、子育てサロンの時には子どもや母親たちを応援しようという、自分たちが今度は担い手になる。つまりお互いに支援をしたり支援をされたりすることによって相互実現、つまり高齢者の方なら生きがいづくりや健康づくり、そしてそれに関わることによって子供や母親にとったら、地域の高齢者の方々に優しさとか思いやりを学ぶという、そういう相互実現型の地域づくりとか、自立支援というのを「我が事・丸ごと」地域共生社会ではケアリング・コミュニティと言って、まさにG委員がお話されていたサロン活動はそうですね。今までサロンでサービスを受けていた方が今度は子供たちのためなら自分が準備すると言って手伝いに回ってくれる、これは先程A委員がお話された、いきいき百歳体操を住民の方々が企画して一緒にしていくということに繋がってくるのではと思っています。

H委員：

両極端に言うと、私たちの中でも、ボランティアをしている人の仲間は皆ボランティアをしているのです。ボランティアをしていない人のグループは皆していません。それと一緒に、私はニュータウンでずっとボランティアをしてきたので、その仲間が多く、すごく刺激的にこの30年間ずっとしてきたのですが、年にもなりましたし、地元である吹田の南の方に戻ろうと思い、色々と調べてみると、ボランティアをしていない方の数がすごく多く、ニーズも全然違うのです。皆様、困ったと言わないのです。何か困っていないか聞いても、大丈夫と答えるのです。電気が切れていても「困っていない」と言うのです。そういう状況があるので、コーディネーターというのはとても良いと思います。行政が言ったことは結構聞きやすいのかもしれませんが、また、知り合いなら家に来てもおかしくないのですが、一人暮らしの方も、高齢のお二人で過ごされている方も、人に家に入ってきてほしくないという方がほとんどです。そういう人の数が多く、それが普通になってしまっているのです。昼食会には出てきても、それ以外にはほとんど出てこられないです。昼食会は地区福祉委員の方が熱心に声をかけておられるので出てこられて、それも昔と比べてよく出てこられるようになったと聞いているので、声掛けはすごく大事なことだと思います。そういう意味で、家に入ってきてほしくない人に「体操するので来てください」と言っても、生活の中にそういうことがない人たちなので、難しいと

思います。私自身はマンションですが、その地域は古い村で、仕事がらみでそこに入り込んだ時に、声掛けをしていくと、長年の顔繋がりでお話したりできるのですが、一般的な人には「あの人には言いたくない」とか、そういう少しネガティブな環境がすごくあります。

委員長：

セルフネグレクトではないですが、支援を積極的に求めない方や、活動に対して積極的でない方はプライドがあるのかもしれませんが、助け上手、助けられ上手の反対で、助けられ下手だと思っています。

H委員：

以前すごく気になったことがあります。ある一人暮らしの方が亡くなった時、子どもさんたちが電話を何度もかけていたのですが、それに出なくても「畑に出ているのだろう」と思って何もせず、状況がずっと分からなかったというケースがありました。その時に地域の方は「言ってくれたらよかったのに」と皆仰られるのです。しかし以前から関係性があれば言っていたと思いますし、こういう残念なことにならないように信頼をどうつくっていくかという方法、地域づくりの良い案があればと思います。

委員長：

二つの枠組みがあると思います。一つは、市域、中学校域、小学校域というサイズ、エリアの設定をどうするかというポイントと、もう一つはH委員も仰ったように、色々なところに参画されている方や、積極的ではなくてもサロン等に参加されている方と、反対に、よく活動されている方とお話していると出てくるのが、本当に来てほしい人に来てもらえないと言われるような、そういう方々に対して、どういう地域づくりをしていくかということについては、行政や社会福祉協議会がアプローチ、アウトリーチをしていくようなプログラムと、それから先程仰ったように参加しようと思った人へのきっかけづくりで活動が活性化していくという、2つの枠組みがあると思いました。

I委員：

私の担当する地域は岸部なのですが、府営住宅では、どのような方が住んでいるのかも分からない等、色々な問題を抱えています。ずっとアプローチをしているのですが、なかなかうまくいきませんでした。自治会の方から、体操教室をしたいという話があり、体操の後に茶話会をするのですが、自治会の御希望としてはその茶話会がメインだったのです。皆様、認知症予防や介護予防に興味があって、お体を動かしたいという気持ちがすごくあるので、ツールを体操教室にしたのですが、茶話会をすることによって、孤独死を防ぎたいというはっきりとした目的をお持ちでした。今までは地域包括支援センター主催で行うことが多かったのですが、今回は自治会主催でしたいということになったので、これは良い話だと思いました。自治会で予定を組んでもらって、チラシをこちらで応援して作らせていただいたので、それを回覧するなど、すごく努力されて、当日は51人の高齢者の方がお越しになりました。体操教室もお茶会も自治会の方が全部御用意され、2時から開始だったのですが、自治会長さんは朝から用意されていたそうです。最後に反省会をした時、初めて行ったので皆様すごくお疲れになっていまして、やはり御負担は大きいのですが、「1回したから次回からは段取りが分かった」と仰っていましたし、自治会主催ですということのはものすごく波及力が大きいと思ひまして、こ

れだけ高齢者の方が集まるのだと思ってびっくりしました。自治会長さんが仰ったように、茶話会をすることによって顔の見える関係性を作って、近くにこんな人が住んでいて、その人はこういうところに来られていて、最近来ていないとか、気付くところになりたいということが御希望です。包括としては、講師の派遣とチラシづくりの 2 点だけをお手伝いさせてもらって、あとは自治会主体でしていただければと思っています。やはり一番身近な自治会の存在は大きいと感じました。

J 委員：

小学校区よりもっと身近な地域は自治会なのですね。地域包括支援センターがつつい主導でしてしまうところを、自治会が主催されてそれをサポートする「伴走型支援」という、地域の方がしたいことについて寄り添いながら専門的なアドバイスやノウハウを提供していくという方法が有効だということでしょうね。今の活動のアイデアとしても、積極的にしていけるし、地域包括支援センターが自治会などでするところにノウハウを提供するというような仕組みづくりもいいかもしれません。

B 委員：

今、チラシ作りをお手伝いされると仰っていましたが、高齢クラブの例を見ている、チラシづくりは難しいのです。パソコンを使えないので、紙を切ったりして、普通手書きというのはあまりないのですが、デザインのセンスも必要になってくるので、自治会でもそうですし、色々ところで告知する時のチラシのデザインがすごく難しいので、地域包括支援センターは若い方も多いので、イラストが得意とかデザインが得意というのを、それぐらいはデザインしますよと言っただけならば、色々サロンをする上で助かると思います。

委員長：

男性の方で地域活動に参加するのは少ないとよく言われていますが、広報デザイン企画ボランティアみたいなものを例えば社会福祉協議会が企画するというのはどうでしょうか。かなり前なのですがパワーポイントが出た頃の頃に、茨木市の地区福祉委員会で、若くてパソコンが得意な方が企画委員に指名されるということがありました。今では当たり前のようになっているパワーポイントですが、昔は少し難しく、字や写真がクルクル回って出てきたり、色が変わったりしながら、自分たちのプロモーションビデオみたいなものを作り、大阪府社会福祉協議会で発表されたそうです。そのように、退職された方の中でもパソコンができる方はいらっしゃると思うので、企画づくりのボランティアグループをつくり、そこに聞いたら一緒にアイデアを作ってくれるというような仕組みもいいと思います。

E 委員：

今、ボランティア連絡会では男性の方を増やそうという話が出ているので、こういう企画は良いと思います。コミュニティサロンでたまにあるのですが、精神的にしんどかった方の中で、パソコンができたり、デザインができたりする方がいて、そういう時はぜひとお話をさせてもらったりしています。

委員長：

茨木市社会福祉協議会が週に 1 回ほど、学習支援と居場所づくりをしています。学習支援の後に社

協の方が毎回カレーを作っていたらしいです。仕事についていない中高年の方がいらっしやったのですが、実は元調理人で、カレーの話を聞いて、それなら自分がすると言ったそうです。材料費の予算を聞いては同じ料理を出さないように自分で調べて工夫されて、そしたら子供たちがすごく喜んでくれて、学習支援も活性化したのだそうです。その方は「勉強は嫌いだから料理だけ作りに来る」と言いながら、生きがいとしてずっと関わっておられるという、そういう事例が実際にありました。吹田の良いところを活かすというのと同時に、「昔取った杵柄」みたいな、例えば大工道具が得意なグループを作るなど、色々なところをお願いしていくという形もできそうですね。

K委員：

吹田でも土曜日の小学校で、小学生のお料理教室を月に2回ほどしている方がいます。300円ずつくらい集めて、子どもたちと一緒に料理を作ったり、一緒に食べたりとされています。その方が全部一人で采配なさっていますが、親御さんやボランティアが何人か手伝いに行っています。私の身内も一時期、男手が欲しいからということで手伝いに行ったこともあります。公共のものではなく、個人的にそのようなことをなさっているところがあるのです。材料費は持ち出しだそうです。

あと神戸かどこかのデイサービスで、学校から帰った時に親が勤めていて不在という子どもたちについて、デイサービスへ「ただいま」と帰り、高齢者と一緒に遊んだり、宿題を見てもらったりしている、という地域があると聞いたことがあります。

委員長：

先週、大阪府の社会福祉協議会で「しあわせネット」という施設の社会貢献事業の、今、大阪がけっこう売りにしているのですが、高齢者や障害者の施設でも、社会貢献として色々な事業に取り組んでいこうというような取り組みが言われているのです。吹田も施設連絡会を熱心に行っているのです。そこ地域づくりのタイアップも模索してはどうでしょうか。施設側は何か地域で活かしていきたいと思っている、だけど、どういことをすればいいのか施設側はなかなかニーズが拾えないところで、他の地域では、デイサービスで利用者さんがいない夕方の時間帯に、学童保育で帰りの遅い子どもたちのために地域の方々が食事を作って、孤食を防ぐという取り組みをしているそうです。そのように、施設連絡会と協働というのも模索してはと思います。

L委員：

私は引っ越しをしてきて、吹田にはあまりなじみがないのです。皆と誘い合っどこかへ行くようなことは全くないし、ご近所の方との触れ合いもないです。自治会の活動をしたこともあります。結局、吹田市にはあまりなじめなくて、例えば一人暮らしで今まで会社に行っていて、いきなり吹田市の現実に今から何をしたいか分からない、どうしていいか分からないという方も多いと思うのです。先程の話題でも、その場にどう行けばいいのか疑問でした。自分としてはご飯を食べに行かなくてもいい、自分でできるから、それから、話さなくてもいいのだけれども、何となく一日ボーっと経ってしまうとか、そういう方はすごく多いと思います。そういう道筋ですが、どうやってその場に行ったらいいか、いきなり行って変じゃないとか、色々と思うことがあると思うのです。それを飛び越えてそこへ行くような道筋ができればと思います。

委員長：

転入者や、今まで仕事が忙しくて地域とつながってこなかった方などの「地域デビュー作戦」みたいなものを、どう考えていくかというのも、一つの提案かと思います。

M委員：

シルバー人材センターが設立された目的は、高齢者が地域社会の中で担い手として働くという、社会的な活動に参加することで、高齢者の方の生きがいや充実した生活を実現し、活力ある社会をつかっていく、ということです。その目的を皆様に知っていただいて、元気な高齢者の一つの居場所と考えていただければと思います。認知度を上げ、会員を増やし、仕事をしながらいつまでも元気に過ごしていただきたい、活動をしています。なかなか会員が増えない現状はありますが、地域に出向き、説明会をしていきたいと考えています。

委員長：

資料2で見ると、「生活支援」や「介護予防サービス」をどう作るかという協議会でもありますが、「高齢者の社会参加」という部分が、担い手づくりや高齢者の生きがいづくりという、今の議論と重なると思います。現役時代の能力を活かした活動として、料理や広報の企画を立てるなど、興味関心がある活動として、健康体操など、また、新しいことにチャレンジするなど、色々なアイデアがあると思います。「一般就労」としてはシルバー人材センターが関わってきますし、趣味の活動や健康づくりの活動、地域活動という風に、幅広い社会参加を想定すると、今までの御意見は全部つながっていると思います。それをこれからどう整理していくかということですね。「ちょこっとサポーター」のようなサービスづくりと連動させて考えていくことが大事だと思います。

F委員：

社会福祉施設の地域貢献活動という話が出ていましたが、今、高齢福祉室では来年から3年間の介護保険施策の計画策定をしているのですが、参考資料として介護保険の事業所さんに色々な調査をしています。ほとんどはサービス内容や人材確保についてなのですが、地域貢献についても2つ聞いています。1つは、サロンや体操など地域の活動に場所の提供が可能かということ、もう1つは地域での研修会などへ専門職を派遣することは可能かということをお伺いしています。結果がまとまれば、吹田市の事業所さんが地域に対してしてもらえること、してもらえないことが見えてくるとと思いますので、また報告させていただきます。

G委員：

社会福祉協議会では施設連絡会を行なっているのですが、施設が地域にどのようなことができるのかという一覧表を作成して毎年更新し、地区の福祉委員長さんにお渡ししています。例えば保育園のプールを子育てサロンに使えるだとか、会議室を使えるということがあります。

委員長：

今までは施設連絡会での取組だったものを広げて、吹田市での全体的な取組として考えていけたらと思います。できているものも多くありますし、足りていないものについて、どう形作っていくかを考えていけたらと思います。

N委員：

制度化すると使いにくくなるという話もありましたが、私たちヘルパーが利用者さんのお宅にお伺いするにあたっては、ケアマネジャーさんがその方の困り事をアセスメントしているので、きめ細かなサービス提供ができています。ヘルパーが入った時には、ペットボトルの蓋を開けておくとか、カボチャが固いから切っておくとか、雨戸を閉めてほしいとか、高齢者ならではのニーズがたくさんあります。それを「助けられる」となると、少し気が引けてしまうのではと思います。便利屋さんというのはすごく良いと思いますが、「何かないですか」と来てもらった方が利用しやすいかと思いました。安否確認も兼ねられると思います。

委員長：

ヘルパーさんは本人や家族と一番身近な専門職だと思っています。ヘルパーさんが現場でよく聞く困り事をリストに挙げてもらうことで、先程の話であったリスト化につながると思うので、御検討いただきたいです。

C委員：

福祉委員としては、積極的に出て来られる方に関しては把握できるのですが、それが難しい方が多いのも現状です。ケアマネジャーさんやヘルパーさんから情報をいただけると非常にありがたいです。色々な困り事が介護保険外だということを、ほとんどの福祉委員が知らないと思います。そういう困り事が出てきた時に、ヘルパーさんの方から情報をいただけると、マッチングがしやすくなると思います。

J委員：

決められた事しかできないヘルパーさんという意味では、やはりケアマネジャーも日々悩んでいるところです。ヘルパーさんに対しては支援の計画や今後の目標も伝えているので、掃除のみ依頼しているヘルパーさんに急に買い物を頼まれても、お断りしていると思います。柔軟な計画にできればよいのですが、目標設定を厳密にするようにとされているので、介護保険のサービスだけでは支援しきれないのが現状です。介護保険外の自費のサービスで考えても、高額なものが多く、悩んでいるところです。

委員長：

地域の中でサポートしてくれる人や団体の情報をケアマネジャーさんも知っておくことで、「介護保険外だからと言って断られた」ということがなくなり、信頼もされると思います。経済的に豊かで、人付き合いが煩わしい人だったら自費のサービスでもいいし、色々な目的別のサービスを考えていきたいですね。

O委員：

吹田市の強みとして、色々なサロン活動等がすごく活発というのは感じます。うちの事業としても、認知症カフェ交流会に参画させていただいています。そこで広報を担当していますが、情報共有・発信がとても難しいと感じています。具体的には、民生委員さんの御協力が得られていないことや、情報の共有先をもっていないことが課題です。地域の中でお互いがお互いを必要としていても、その共

有ができていないので、地域ごとで見える化が必要だと思います。本人に合ったサポートを選びやすいように分類しておくのがいいかと思います。

委員長：

企業は広報が上手だと思うので、各団体の広報担当向けに情報発信の研修をお願いできたら、地域の方にその企業を知ってもらえることにもなるし、お互いに良いのではと思いました。協議会から何か「やってください」とお願いをすると負担感が出てしまいますが、それが自分たちの活動に活きると感じられるような仕組みができればと思いました。

まとめとしては、一つは、市域、中学校域、小学校域、自治会域という地域によってのメニューを考えていくということ。それから、活動に参加されている方々に対しての支援をしていくことと、転入者や退職者、プライドの高い人やセルフネグレクトの方々に対してどのような支援をしていくかという企画をしていくことでした。福祉委員さんが取り組んでいることと、ヘルパーさんやケアマネジャーさんの知っているニーズとが歩み寄ると、すごく良いものができるというお話も出ました。それから、施設連絡会が積極的に活動しておられるということなので、そことの連携も考えられるということでした。

原点に戻って、吹田の強みを活かしてどんな活動を展開していけるかという、中身の深い話ができたとと思います。

事務局：

第3回の協議会につきましては、10月か11月頃を予定しています。日時と場所が決定次第、委員の皆様には御案内をお送りいたしますので、よろしく願いいたします。

委員長職務代理者：

超高齢社会において、住民の方に自分の生活に関わることなのだ意識をもってもらうために、シンポジウムを行ないたいと思っています。次回の協議会に向けての事前ヒアリングと併せて、シンポジウムの内容についても御意見いただきたいので、よろしく願いします。今年度中に会場を押さえ次第、お知らせしたいと思います。